

## 親切は人の関係の始まり

山形県 第二中学校 一年

海原 匡登

「台湾に転勤することになったよ。」

僕が3年生になったばかりの2020年の春、会社から帰ってきたお父さんに突然聞かされました。僕は海外に行ったことがないし、もちろん家族みんな中国語は話せません。

コロナが世界中で流行し始めたときだったので、何度も何度も家族全員で話し合い、その年の秋にみんなで引越しすることになりました。家族全員で行く決め手になったのは、台湾が日本と親しい国だからです。台湾が日本人にとっても優しいと聞いても、実際台湾の人に会ったことがなかった僕には、よく分かりませんでした。

でも空港に着いてすぐ、台湾人の温かさに気づきました。当時はコロナで県外に出ることさえも控えていた頃なので、空港はガラガラでした。言葉が分からないところで、コロナや引越しの手続きなどで困り果てていた僕たち家族に、空港の職員さんたちがたくさん集まってくれて、入国手続きをすべてやってくれました。

3週間の<sup>かくり</sup>隔離後、町に出てまたびっくりしました。買い物の支払いをしているときに、お店の人が言っていることが分からずとまどっていると、列の後ろの人たちが通訳したり、身ぶり手ぶりで教えてくれたりするのです。レジが進まないことに怒るところか、みんなが助けてくれることが何度も何度もありました。

僕はハッと気がつきました。みんな日本語が分からなくても、困っている日本人がいたら、いろいろな方法で助けてくれるのです。台湾では買い物をするたびに、客もお店の人も笑顔で、

「謝謝（ありがとう）。拜拜（バイバイ）。」と言います。温かくて良い文化だな、と思いました。

お母さんは、「大ざっぱで、おおらかで温かい台湾の人たちは、昭和の日本を思い出すわ。」と何度も言っていました。

台湾では、日本人はいろいろな場面で本当に親切にしてもらえます。日本に震災が起きたときには、台湾全土からすごい額の寄附金が集まります。日本人は台湾人の優しさに慣れすぎてしまいそうにもなりますが、小学校の卒業式で日台交流協会の方が祝辞でこうおっしゃいました。

「友情も片思いだと永遠には続かない。台湾から受けている優しさを、返せる大人になってください。あなた方が日本と台湾の<sup>か</sup>架け橋になってください。」

中国語は難しく習得することができなかったけれど、優しさに言葉はいらぬことを、僕は台湾で学びました。滞在中の3年半で受けたたくさんの小さな親切を、いつか僕が返せるように、そして日本と台湾の架け橋になれるように、これからどんどんいろいろな経験をして、いつかまた台湾に行きたいと思います。